幻想日記帳

ラクト・マジック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想日記帳

【Ｎコード】
Ｎ５２０８Ｘ

【作者名】
ラクト・マジック

【あらすじ】
――幻想日記帳。
それは幻想郷での毎日を書き記した物である。

第1話「スペカ」

ここは博麗神社。巫女の博麗霊夢は神社の境内を掃除中。

「霊夢ー！」

普通の魔法使い、霧雨魔理沙。彼女は魔法使いであり、種族は人間である。

「何？私は忙しいのよ」

楽園の素敵な巫女こと博麗霊夢。彼女も魔理沙と同じ人間である。

「私のスペカ見なかった？」

「知らないわよ」

スペカとは「スペルカード」の略である。スペルカードはこの幻想郷での決闘ルール「スペルカードルール」で使うための技や契約書の総称。強力な技を繰り出せる。

「私の『ドラゴンメテオ』が見つからないんだ」

「そう言えば、私も『夢想封印　瞬』が無いわ」

「霊夢も無くしたのか」

「無くしたか食べたの二つね」

「自分のスペカを食べるなよな」

「霊夢、魔理沙」

「お、咲夜。どうした？」

完全で瀟洒なメイド、十六夜咲夜。彼女もまた人間であるが、吸血鬼のレミリア・スカーレットが主である「紅魔館」でメイド長をしている。

「私の『ザ・ワールド』をご存知かしら」

「咲夜も無くしたの？」

「あなた達も無いのかしら」

「無いんだぜ！」

「威張るな」

「美鈴やパチュリー様も無くしたって言ってたわ」

「皆無くしたのか？」

「お嬢様も妹様も無くしたそうよ」

辺りに一陣の風が吹いた。スペルカードが無くなっている。なぜだろうか。

「犯人はヤスね」

「ボードビア殺人事件かよ」
「見た目は巫女！頭脳も巫女！」
「お前ら微妙なボケをするな」
「ほう、では、真のボケを見せてもらおう」
「臨むところ！布団がふっとんだ！」
さっきとは違う一陣の風が吹いた。
「……」
「……」
「おかしいな。今のタイミングはぴったりだったのに」
「何でそう言えるのかが不思議ね」
「これを見てくれよ。ダジャレ全集って言う本でパチュリーからパクったんだがダジャレのコツとか書いてあってさ」
「パチュリー様はそんな本を……」
「タイミングはぴったりだったのにしらけちまったぜ」
「ぴったりだったわね。いろんな意味で」
魔理沙「嫌みに聞こえるぜ」

霊夢「正直嫌みよ」

「（うわ～……）」

「とにかく、スペルカードを探さないと」

「はっ！すっかり忘れてた！」

＊　＊　＊

「あった？」

「……無いぜ」

「咲夜さ～んここにもありません」

「無いわ」

「どこでしょうね～……」

その時、人間の里が激しい光で包まれた。

「！あれはドラゴンメテオ！」

「あそこにあるのかも！夢想封印　瞬！！」

「ザ・ワールド！」

「地龍天龍脚！！」

「シルバードラゴ～ン！」
「いえろ～ぜぶら！」
「それ、違いますよ！て言うかいつの間に！」
「龍の頸の玉～！そこか～！」
文「ふ、風神少女～（龍関連が多いのはなぜ？）」

＊　＊　＊

「！これは？」
そこにはドラゴンメテオを発動された形跡がはっきりとしていた。
「あ～あ、遅かったか……ん？君たち」
「霖之助さん」
「こーりん！」
「スペルカードをふざけて店に置いといたら大変な事に人間の子供が盗んでスペルカードを使ったようだよ」
「はあ？」
霖之助を取り囲む。
霖之助はその一部始終を話した。
「魔理沙に頼まれ？」

「そうなんだ」

「そう言えば、覚えがある！」

「そうだよ魔理沙。君、僕にスペカを売買させて、置くように頼んだんだよ」

「とりあえずスペカはどうなの？」

「ドラゴンメテオ、夢想封印　瞬は持って行かれてね」

「地龍天龍脚は？」

「風神少女～」

「大丈夫。無事さ」

魔理沙と霊夢以外はほっと安心をしていた。

「あ！あれを！」

文が指を指す。そこには夢想封印　瞬を使ったのか、高速で空を飛ぶ人間の姿。

「私のスペカ……」

自分のスペカが無事では無いことを確認した霊夢には、落ち込むしか方法は無かった。

「……これは」

「？」

「魔理沙！霖之助さん！歯を食い縛れ！」

「！？」

「夢想天生！！」

「ギャァァァ！」

「なぜ僕まで…ぐわぁ！」

「悪は去った……」

「（たった今恐怖がここに！）」

そう感じ取ったものは皆、人間の里を後にした。

「……ふぅ、あ、夢想封印　瞬……？あ、二つあったんだった」

「何ィ！？」

第2話「かわ」

「鮭♪鮭♪鮭は旨いぞ～」

時は昼過ぎ。場所は博麗神社。霊夢は昼ご飯の真っ最中であった。

「魚の匂い～♪」

魔法使いの魔理沙。霊夢の無二の友人。しかし、手癖が悪く、親しき中にも礼儀あり何て言葉は彼女にとっては真夏の炬燵並みに無意味なのだ。

「うわ！例え下手糞！」

「あら魔理沙。魚はあげないわよ」

「まだ何も喋ってない」

「何と言おうと、昼ご飯はあげないわ」

「だからまだ何も……ん」

「何よ？」

「お前……魚皮まで食うんだな」

「……え？魔理沙は食べないの？」

「食べないぜ。捨ててる」

「ぬぅぅわぁぁんだってぇぇぇぇ！！？」

「何だ何だ！？」

「魚の皮を食べないとかあんたバカなの！？死ぬの！？皮にこそ栄養があるのよ！！それを食べずに捨てるとは言語道断！自然に謝れ！魚に謝れ！謝罪しろぉ！！魚野鮭助に謝れぇ！」

「突っ込み所多過ぎて突っ込みが間に合わん！……お前は食の神か何かなのか……？」

「何言ってるの、常識よ」

「誰だよ鮭助って……」

「とにかく、食べ物は大事にしなさい」

「それには納得するが……」

言葉に詰まった魔理沙。まるで魚の骨でも突っ掛かったようなしかめっ面をしている。

「今私はナレーションと霊夢を無性にぶっ殺したいぜ……。じゃあ、聞くけどよ、霊夢は皮なら何でも食べちゃうのか？」

「果物、魚は勿論。虫や肉も直で皮ごと」

「まともなもの食えよ、お前いずれ道に映えてる雑草を無意識に食うようになって、あいつ道草食ってる！……何て言われるような人

間にはならないでくれよ？」

「もう食べてるわ」

「霊夢。今度、飯おごってやるよ……」

「そう言う魔理沙は食べないのよね？」

「私はキノコ中心だから、肉や魚はあまり食べないんだ」

「そう……」

「おーい！巫女ー！魔理沙ー！」

呼ばれると同時に辺りに寒くなっただ。振り向くと氷の妖精、チルノがいた。道理で辺りが寒くなった訳だ。

「なあ、チルノ」

「何だ？魔理沙」

「お前は何か食べる時、皮も喰うか？」

「カエル食べる時は皮ごと食べるよ」

「おお、霊夢！皮ごと派がいたぞ！」

「別に知らせなくてもいいけど……」

「あ、そうだ。神社に目的がある奴の道案内をしたんだった」

「誰だ？」

「こいつだ」

「よっ！あたいだよ。小町だよ」

「ああ、閻魔んとこの」

三途の水先案内人、小野塚小町。閻魔であり、彼女の上司である、四季映姫・ヤマザナドゥの部下で死神。

「三途の川から遥々と来たよ」

「か、かわ！？」

「ま、魔理沙！かわはかわでも、かわ違いよ！」

「ど、どうしたんだい？魔理沙？」

「かわすき病だね」

「何それ？！」

「小町！まるごと食べるの！？か」

「……は？」

「小町、かわいそう……」

「れ、霊夢！そのかわはどうなんだ！？」

「（しまった！）だ、だから！か、かわ違いよ！」

「あら、皆さんお揃いで」

「あら、咲夜」

「買い物帰りに寄ってみたの？どう？このバッグ？新品ですわ」

「ほぅ、良質なバ……！！」

「？」

霊夢は新品のバッグが革製のバッグである事に気付く。これでは魔理沙が面倒だ。霊夢はその場逃れを試みた。

「な、何買ったの？咲夜！」

「お嬢様が喉を……」

「！！」

その時、霊夢の頭の中には「喉をお渇きになられた」と言う短文が思い浮かんだ。またしてもその場逃れのを試みる。

「そそそ、それなら、は、早くレミリアの所に行かなきゃいけないんじゃないの？」

「何でぎくしゃくしてるんですか？」

「べべべべ、別に……」

「まあ、確かに帰りますか」

「そうよ！それが良いわ！」

「帰って洗濯物も乾かさないと」

「あ」

「？」

魔理沙……には聞こえていなかったようだ。運がよかった。咲夜は神社を後にし、紅魔館へと帰った。その後、チルノ、小町も神社を後にして、それぞれの場所へ帰って行った。残るは……魔理沙のみ。

「腹減ったぜ」

「お茶のむ？」

「頂くぜ」

「はい」

「サンキュー」

「かわ」。このワードは今現在ＮＧワードと化した。一瞬でも油断をすれば……。さて、どうしよう……。そうだ！「かわ」に派生出来ないような会話で凌ごう。

「魔理沙は魔法使いでしょ？」

「いや、分かりきった事だろ……」

「何か魔法見せてよ」

「良いぜ。……光符――ルミネスストライク！！」

魔理沙は集中した後、魔法を試みた。

「……あれ？」

「……失敗？」

「いやあ、失敗失敗！河童の川流れ……」

「あ」

「かわ！？食えるか！？……って誰が河童だ！！」

「もういい加減にしろーっ！！」

第3話「心理」

紅魔館の大図書館。ここはパチュリーの図書館である。

「あら、パチェ、何やってるの」

レミリア・スカーレット。紅魔館の主の吸血鬼。彼女は大図書館を訪ねていた。

「ああ、レミィ。香霖堂に面白い物があったわ」

「心理ゲーム？」

パチュリーがレミリアに渡した物は心理ゲームの本。レミリアもパチュリーもこれがあまり解らずにいる様子。

「どう使うのかしら」

「咲夜なら解るんじゃない？」

「咲夜ぁー！」

「でも、今は買い物中よ」

「それを早く言いなさい」

「じゃあ、美鈴は？」

「門にいるんじゃないかしら？」

「よし！レミィ！行くのよ！」

「いやいや、私主よ！そして吸血鬼！パチェが行きなさいよ！」

「私は日に当たると液体化してしまうのよ！」

「何で融解してるのよ！私は灰になってしまうのよ！死ぬのよ！ます、それ本当？」

「嘘よ」

「じゃあ！早く行きなさいよ！」

「仕方無いわね……」

＊　＊　＊

紅魔館の門の前、門番の紅美鈴の仕事場だが、美鈴本人は昼寝をしてばかりで仕事が勤まっていない。

「美鈴」

「あ、パチュリー様、何ですか？」

「レミィがお呼びよ。珍しく寝てないわね」

「何か凄い物見つけたんですよ」

「ほう、それは……心理ゲームの本じゃないの！」
「お嬢様に見せたら興味持ちそうですよ」
「残念。ダブってるわ」
「え！？」
「とにかく早く来なさい」

＊　＊　＊

「遅いわよ！パチェ！」
「ごめんごめん」
「申し訳ありません……」
「……で、美鈴、これが何か解るかしら？」
レミリアは例の本を美鈴だが、の目の前に差し出した。不意を突かれたのか少々驚いた美鈴だが、こほんと咳払いをし、質問に答えた。
「外来の品物のようです。書かれている質問に答えるようです」
「占い、と考えていいのね？」
「そうですね～」

「試しに、やってみましょう……」

「そうね。えっと、あなたは今天国にいます。しかし、神様により一度だけ生まれ変われるようになりました。どう生まれ変わりますか？……凄い質問ね」

「きちんと仕事が務められる門番になりたいです」

「そんなの、天国に行かなくても成せる事よ」

「運動神経が良くなりたいわ」

「むきむきになりたいんですか？」

「運動神経良い＝むきむき、と言う考え方はどうかと……」

「むきゅむきゅ？」

「言ってないわよ」

「あなた達、本当に天国に行かせるわよ」

「あれぇ？何やってるの？みんな」

悪魔の妹。フランドール・スカーレット。レミリアの妹である。彼女は珍しく図書館に訪れたらしい。

「フラン。面白い物があるわよ」

「し、心理ゲーム？」

「そうよ、あなたなら興味持ちそうかと思ってね」

「私、これ、地下で読んでた」

「あら、読書済み？」

「つまらないから破壊しちゃった！そしたら柱もいくつか壊しちゃってさ～」

「この前の軽い地震はあなたの仕業だったのね！」

「壁も三ヶ所ぐらい壊したから、地下の風通しがよくなったよ！」

「何やってるの！？」

そう、彼女はありとあらゆるものを破壊する力を持っている。彼女に掛かれば、紅魔館もいとも簡単に崩壊する事も可能だろう。

「ちょっと！ナレーション！何言ってるの！？」

「い、妹様はそ、そそそんな事しませんよね！」

「多分しないよ」

「多分！？」

「とにかく、私はもう心理ゲームには興味無いの！」

「解ったわよ……全く、ナレーションがあれだと碌な事が無いわ……」

「他にも見て行きましょうか」

「今日はとても寒い日です。ホットコーヒーとアイスコーヒーがあります。どちらを飲みますか？」

「ホットコーヒーでしょ。常識的に」

「コーヒー飲めない！苦い！」

「そう来たか……」

「コーヒーって何ですか？」

「好き嫌い以前の問題じゃないの……飲ませるから来なさい」

コーヒーを知らない美鈴の為に、パチュリーと美鈴は図書館を出て台所に向かった。

「フランもコーヒーは飲めないよね？」

「私はコーヒー大好き！！」

「……ッ！！」

「あれぇ？お姉様、飲めなかったりする？」

「の、飲めるわよ！１２０杯は余裕よ！」

「わあ、すごーい！」
「美鈴、どうだったかしら？」
「苦味がありましたが、中々でした」
「パチェ！私にもコーヒーお願い！」
「へ？」
「早く！」
「解ったわ」
「いやぁ、あんな物があったとは」
「美鈴凄いね！お砂糖無しで飲んだの！？」
「妹様はお砂糖、入れるんですか？」
「当たり前だよ！入れなきゃ苦いんだもん」
「レミィ、しっかり！」
「うわあ！苦過ぎる！」
「ほら、砂糖！」
「あ、有難う……」

「あ、塩だわこれ」

「馬鹿！！水！水！」

「吸血鬼は水は苦手なんじゃないの？」

「紅茶飲んでるから大丈夫よ！」

「じゃあ、行くわよ！水符――プリンセスウンディネ！！」

「誰がスペカ使えと言った！コップに一杯やれば良いのよ！香霖堂に売り付けるわよ！」

「やめなさい！ほら、水！」

「ふぅ、有難う……ぐわぁ！」

「ひ、被弾しちゃったじゃない！」

「……何か、上が凄い事に」

「こ……怖いから行かないよ……」

「パチュリー様！これは一体！？」

「ああ、咲夜」

「ああ、咲夜じゃないですよ！どうされたんですか？」

「斯々然々で」
「そうなんですか、斯々然々何ですか……殺人じゃないですか！？
それ！」
「殺鬼ね」
「お巡りさぁん！！」
「呼ばれて参上、椛と、」
「響子と、」
「犬咲夜！！」
「何この軍団！」
「連行！」
「ちょ、やめな、あー！！」
「……閉じますか？」
「……そうだね、閉じよう」
「めでたしめでたし」
「めでたくねぇよ！」

第４話「暖」（前書き）

むきゅー！！←

第4話「暖」

架空の世界、幻想郷にも寒い寒い冬が訪れた。巫女の博麗霊夢は、あの時の異変を思い出す。

「また、春が来なくなったりするのかしら……」

幻想郷を悩ませた異変。――春雪異変。霊夢は正直、今の内に白玉楼に乗り込みたかった。しかし、それは不可能、と霊夢は察した。――何故なら。

「う～暖かいわ～」

今、霊夢の家にはこたつがあるからである。

「異変何て起きないわ～」

「よ！霊夢！来てやったぜ！」

「はいはい。寒いから閉めた閉めた」

「何だよ。温かく歓迎くらいしてくれよな」

「暖かいのはこたつだけで十分よ」

「ずるい！私も入れろ！」

外ではちらほらと雪が舞い降り、いつしか博麗神社は白く染まっていた。雪の色で……真っ白に。

「雪降ってるんだから寒い訳だぜ。あ、霊夢！みかん取って！」
「台所よ。自分で取りなさい」
「やだ！寒い！」
「私だって寒いの！」
「脇出してるからだろ？」
「黙らっしゃい！！」
こたつには、一度入ったら抜け出せない。いや、出たくなくなるのだ。まるで冬場のブラックホールである。
「例え微妙だな」
「魔理沙～。お茶～」
「自分で取って来いよ」
「やだ！寒い！」
「私だって寒いぜ！」
「脇出してるからでしょ？」
「出してないぞ？！私は！！」
「霊夢」

障子の奥から名前を呼ぶ声。その声はどこか洒落ている。

「誰〜？」

「私です。咲夜です」

完全で瀟洒なメイド。十六夜咲夜。紅魔館の従者である。カチューシャにメイド服。そして銀製のナイフ。いつもの寒そうな格好に対し、防寒は黄色いマフラーのみ。

「お嬢様に頼まれ、伝言です」

「？」

懐から手紙を取り出し、こたつの上にすっと置いた。置いたと思うと、咲夜は「では、失礼しました」と一礼をし、博麗神社を出て行ってしまった。

「何だ？」

「ふーん。レミリアからね〜……！！」

霊夢は手紙の文章に絶句をしてしまった。そして、また文頭から目を凝らして手紙を読む。

「……魔理沙！」

「？」

「――紅魔館に行くわよ」

「……は？」

霊夢は魔理沙に理由を話さず、せかせかと紅魔館に向かった。

「な、何だよー！」

「いいから来なさい。暖かくなるわよ」

「（まさか、戦いでも始まるのか！？）」

ここは紅魔館。吸血鬼レミリア・スカーレットの住む悪魔の館。手紙により何かに招待された霊夢、魔理沙は門の前に着地した。

「あ、霊夢さんに魔理沙さん」

「よっす！美鈴！」

紅魔館の門番、紅美鈴。外は寒いにも関わらず、相変わらず寒そうな格好だ。彼女もまたマフラー一つ。

「中に御入り下さい」

「サンキュー」

＊　＊　＊

「ロビーが賑やかだな」

「やけに暖かいわね」

二人が想像してた以上にロビーは暖かった……と言うより、むしろ暑いようす。真冬日な外とは真逆にロビーは春の下旬のようだった。

「あら、いらっしゃい」

「咲夜」

「お嬢様が紅魔館内を暖めて、皆を誘っているの」

「あいつもいい事するわね」

「あら霊夢〜。来たのね？」

「紫様、立ち食いはいけません」

彼女は八雲紫。スキマ妖怪であり、妖怪の賢者である。そして紫の式、八雲藍。九尾の武神である。

「この中はとっても暖かいわよ」

「紫様。聞いてますか？」

「結構いるんだな」

「今のところは山の神様達のいるわよ」

「ほう。ちょっと見てくるぜ！」

＊　＊　＊

「おーい！神様！」

「あ、魔理沙だ！」

「おお、珍しいのう」

「魔理沙さん達も来ていたんですか」

山の神様の洩矢諏訪子、八坂神奈子。そして巫女であり風祝の東風谷早苗。彼女らは守矢神社の神様二人と、その神社を信仰する巫女である。

「野菜が旨い旨い」

「ああ、御免なさい。最近神奈子様野菜を口にしてないんですよ」

「そ、そーなのかー……」

「そーなのかー。わはー」

「ん？何だールーミアか」

「おお、諏訪子なのかー」

「ん？お前ら知り合いか？」

「そーなのだー」

「そーなんだー」

「そーだったのかー」

突然話に入って来た妖怪。ルーミア。いつも両手を広げながら「そーなのかー」とばかり言っているが、闇を操れる宵闇の妖怪。同時に人の肉を好物とする見た目とは裏腹に恐ろしい妖怪。

「そーだったのかー」

「え、自分を何だと思ってた？」

「イエス・キリストじゃなかったのかー」

「十字架に見立てればキリストだと思ったら間違いだぜ。てか、キリストて何？」

「うむ。解らない」

「神様何じゃない？」

「うむ。同輩か」

「何かな。絶対そのイエスなんちゃらの方が凄いと思うんだが」

「そーなのかー」

「いや、解らないけども。あーもーここにいると会話がごちゃごちゃになるな！」

「そーかなー」

「そうなんだよーだぜ！」

「（だぜ！？）」

「私はそろそろ戻る！」

「ばいばい～」

「生きてたらまた会いましょう」

「何？その意味深な台詞は……」

＊　＊　＊

「それにしても、ちょっと暑過ぎない？」

霊夢の額は汗で濡れていた。ロビーには所々、カーペットが濡れている。霊夢はこれらは汗だ、と察した。

「そうね。下げましょうか……。あれ？」

「どうしたの」

「エアコンが壊れてるわ……」
「な、なんだってー！？」
「パチュリー様呼んで来ます」

＊　＊　＊

「濯いだ瞬間むきゅっと♪」
紅魔館の大図書館。彼女はパチュリー・ノーレッジ。今はロビーで披露するためのパフォーマンスに使う魔術の実験、及び準備中。
「出来たわ！日月符……」
「パチュリー様、いらっしゃりますか？」
「ロイヤルダイヤモンドリング！」
「ちょ！パチュリー様！あー！！」
「ああ！咲夜！余りの暑さに倒れた！木符ーーフォトシンセシス……。これで治るかしら？」
パチュリーは倒れた咲夜をベッドに乗せ、魔術を披露にロビーへと向かった。
「むきゅきゅ。これで大喝采間違い無しよ！今日は寒いから、皆喜ぶわ！はっはっは！」

しかし、この高笑いがすぐに悲鳴になる何て、彼女は思ってもいなかった……。

＊　＊　＊

「暑い～。咲夜～」

「フフフ……皆楽しんでるかしら……あっつ！！」

「霊夢！大変だ！余りの暑さに倒れる奴が続出してるぞ！」

「雨後の筍……とは言うけど、この場合、何て言うのかしらね」

「それより早く外に……」

「イッツ　ショータイむきゅー！！」

「な、何ィ！！？」

「七曜の魔女の華麗なるパフォーマンス、篤と御覧あれ！日月符ーロイヤルダイヤモンドリング！！」

「ば、馬鹿！やめ！ぎゃー！！」

＊　＊　＊

「その後、パチュリーの姿を見た者は一人もいなかった……」

第5話「霊烏地大冒険」（前書き）

うにゅうにゅ。

むきゅ。むきゅ。

第5話「霊烏地大冒険」

「うにゅほーっ！！」

「あら、空。どうしたの、やけに元気ね？」

「さとり様ー！出掛けて来ます！」

「気を付けて」

＊　＊　＊

妖怪の山山麓にある畑、ここには秋の神様が農作業をしている。

「今日も野菜が大量ね」

「うにゅほーっ！！」

「わあ、烏！」

「うにゅ」

「珍しいわね、八咫烏なんて」

「聞け！人類共！今からこの畑を地上侵略の拠点に」

「やめて、本当に」
「駄目！？」
「駄目」
「本当に！？」
「本当に」
「制御棒四枚あげるから！」
「いらないわよ、何に使えば良いの」
「攻撃力上がるよ」
「……私には程遠い話のようね」
「？」
「あー！烏ー！」
「うにゅ！その声は諏訪子！」
「そうだよー」
「うにゅー」
「あーうー」

「（何？こいつら……）」
「諏訪子～非想天則はどう？」
「昨日洗って上げたんだ」
「綺麗になった？」
「うん！」
「じゃあ、お邪魔するかな」
「……地上侵略は？」
「豊穣の神様が何て物騒な！」
「侵略神、許すまじ！」
「もう良いです。はい……」

＊　＊　＊

守矢神社には相変わらず参拝客が多い。神様を信仰しに沢山の人が神社に訪れる。
「おお、諏訪子。戻ったか……おお烏」
「聞け！人類共！今からここを地上侵略の」

「やめて、本当に」
「あら、あなたは」
「早苗〜」
「うにゅな！私より偉い人の偉くない部下！」
「ぶ、部下……？」
「ああ、神奈子様は知らないか」
「核反応制御不能ダイブ！」
「いや、やめて、本当に」
「……うにゅほーん」

＊　＊　＊

「うーん……人工太陽でも投げ付けようかな」
「させないわ！」
突如空を大量の弾幕が襲った。振り向いた先には一つのスキマがあった。

「うわぁ！！」

「ふふふ……」

「危ないじゃないか！」

「聞かせて貰ったわよ、地上侵略、良い響きだわ」

「うにゅ？」

「話は後で。こっちに来なさい」

「……」

＊　＊　＊

「非想天則を？」

「そうよ」

マヨヒガでは暖かな日差しが縁側な射し込んでいた。二人は縁側に座る。そして紫が話をする。

「博霊神社に、発進させるのよ」

「何故？」

「恨み……恨みよ」

「え？」

「私は博霊神社に恨みがあるのよ」

「……」

予想も出来なかった台詞を返された空は、ただ、言葉を失うのみ。
彼女にとって空前絶後の出来事だったから。

「……何で？」

「霊夢……萃香……あいつらに……あいつらに……」

「私に話してみろ。楽になる」

「宴会のメインディシュが～……」

「……うにゅ？！」

「この前、ここで宴会したのだけど、あいつら酷いの！私が用足し中に食べ物は食べられ、お酒全部呑まれちゃったのよ～……」

「……真面目に聞いて損したよ」

「さあ、非想天則の発進を！」

「私帰る。核反応制御不能ダイブ！」

「スペカで帰らないで！ああ！火が燃え移った！？」

「紫様～戻りました……何してんスか！」
「あ、藍～？御帰り♪」
「御帰り、じゃないッスよ？何スかこれ」
「いや～、烏が……」
「あの文屋は火術とか何て使いませんよ！」
「いや、地下の烏……」
「燃え移ってるじゃないですか！早く消して下さい！」
「あーはいはい！水！水！河童かもやしは！？」
「いませんよ！」
「あーあーあー……」

＊　＊　＊

「……！御呼びか！」
河城にとり。山の麓に住む河童。今日は新たなマシンの開発中のようだ。
「このマシンを使う時が来た！出でよ！魔理沙型消防車！」

＊　＊　＊

「むきゅ！御呼びか！」

パチュリー・ノーレッジ。紅魔館の地下に住む魔女。今日は新たな魔法の研究中のようだ。

「この魔法を使う時が来た！」

＊　＊　＊

「紫様！バケツを！」

「待ってー！早いわよ！」

「スキマ使って下さいよ！」

「藍、何かサイレンの音しない？」

「しませんよ。年ですか！」

「違うから」

紫が聞いたサイレンは本物だった。辺りがざわつき始まった。

「藍！あれ！」
「魔法使いじゃないですか……何じゃありゃ！？」
「口から放水してるわね」
「あれ、消防車？」
「火事はここかー！きゅうり食らえー！」
「……」
「紫様！今度はあんなのが！」
藍が指差した先には両方の肩にポンプを持った巨大な亀がいた。
「カメー！！」
亀は左右のポンプから大量の水を放っていた。その威力は絶大で、マヨヒガを圧倒していた。
「圧倒してますね」
「何でそんな冷静なの！圧倒されてちゃ駄目だから！」
「蛙や巫女も来ましたね」
「豊穣ライスシャワー！」
「古の間欠泉！」

「滅茶苦茶ですね」

＊　＊　＊

「うにゅ～どこ行こうかな……ん？火事！？大変だ！消火しないと！……ん、待てよ」

空は自分の所持スペルカードを確認した。
ギガフレアが四枚、ロケットダイブが二枚、メガフレア二枚、制御棒四枚、レイディアントブレードが二枚、サブタレイニアンサンが三枚、核反応制御不能ダイブが三枚……。

「（さて、どれで消火するか……）」

素晴らしきスペルカードが勢揃い。果たして空は何を選ぶか……。

「うん。制御棒四枚使って……これだ！」

＊　＊　＊

「スキマ！来たぞ！」

「あ！空！今大変なの！」

「火事、だろ」

「そうなのよ！あんたのせいだし！」
「悪い悪い。私が消すよ」
「遊ぶなら霊夢の所で……え？」
「任せてよ」
「大丈夫ですか？紫様」
「う～ん……」
空は力を身体全体に溜め、一気にそれらを放った！
「夢想天生！」
「霊夢の技出たぁー！！」
「殴って良い？」
「ふざけないでよ！何で！？」
「夢想天生は打撃を与えないと発動しないんだ」
「天子を使いなさい」
「ど、どうぞ～♪」
「じゃあ」

空は天子を蹴りまくった。蹴って蹴って蹴りまくった。しかし、制御棒の効果か、七回蹴ったら天子は倒れてしまった！

「あざーす！」

「ああ！天子！」

「うにゅ。後一回！スキマ！蹴らせて貰う！」

「は？やめなさ、痛い！痛いから！超痛い！」

「よし、行くぞ……」

空から眩しい光が放たれ、辺りのパワーが空に吸い寄せられるように見えた。

「夢想天生ぃぃぃ！！」

空から巨大な波動が発射される。その波動はマヨヒガを包む。

「……」

「……」

「うおぉぉぉぉ！！！！」

「……て、マヨヒガ崩れてる！」

「あ、やっぱり」

「やっぱり！？」

「ただいま～紫様！藍様！」

「あ、橙！御帰り」

「橙～♪」

「これ……何ですか？」

「マヨヒガだよ、猫ちゃん！」

「……にゃ？」

「あー、橙、これはね……」

「うぅ、酷いです。紫様も藍様も……うぅ」

「ああ！橙が！」

「あ、橙！これは」

「もう無理です！橙は田舎に帰ります！」

「あ、橙！橙！ちぇぇぇぇぇん！！！！」

「……」

「紫様！何で蹴らせたんですか！？」

「知らないわよ！いつの間にか蹴られてたのよ！」

「どうしてくれるんスか！」

「核融合で、一件落着！」

「じゃなぁぁぁい！！！！！」

第6話「バイト」（前書き）

魔「なあ、作者。ギャグ系の小説にナレーションは必要なのか？」

作「……はあ」

第6話「バイト」

紅魔館廊下。ここでは妖精メイド達が今日も所狭しと働いている。そんな中、とある紅魔館の客室。メイド長の十六夜咲夜と悪魔の妹、フランドール・スカーレットの姿があった。

「出来ましたよ、妹様」

「何やってるの？フランにメイド服着せて」

「パチュリー様。妹様がここでメイドをやって見たいと申したんです」

「そうなの、フラン」

「たまには咲夜やパチェのお手伝いもしなきゃと思って」

「そう……。……私の事もお手伝いしてくれるの？」

「うん。してあげるね！」

「有難いのだけど、咲夜」

「はい何ですか？」

「あのメイドは何よ」

「あ！埃が！夢想封印！」

「……」

「霊夢かっこいいー！」

「お手本にしちゃ駄目よ」

「え？」

「そうですよ……では、早速、御仕事ですよ妹様」

＊　＊　＊

紅魔館ロビー。ここはレミリアを始め、紅魔館の住民が集まる憩いの場でもあり、宴等はこのロビーで行うのが紅魔館の常識になっている。

「では、まずは床を掃除して下さい」

「はーい」

「あれ、フランが床を掃除してるわ」

「クランベリートラップ！！」

「え！？フ、フラン！？」

「お嬢様！弾幕が掃除してます。雑巾持って！」

「紛らわしいな……分身しなよ……」

フランの弾幕の力により、広いロビーの掃除は素早く済まされ、咲夜は次の仕事を頼む。

「お買い物をお願いします」

「はーい」

「傘、持って行きなさい」

＊　＊　＊

人里は今日も賑やか。フラワーマスターや咲夜も買い物に訪れたり、この人里で上白沢慧音が寺子屋を営んでいたりする。

「お買い物♪お買い物♪」

無邪気にスキップをするフランの目に、ある物が見えた。

「わあ！」

――雪だ。幻想郷にちらほらと雪が降って来た。フランは直接降る雪を見るのは初めてだったのだ。

「ねえ、お母さん！雪だよ！」

周りからもまた違った無邪気。「人里の子供達も、雪を直接降る雪

を見るのは初めてなのかな」とフランは言った。

「フランちゃーん！」

「あ、こいしちゃん！」

閉じた恋の瞳、古明地こいし。地霊殿に住む古明地さとりの妹。彼女は無意識を操る力を持っている。

「どうしたの？」

「おつかいだよ！」

「へぇ！私もなんだ！」

「そうなんだ！！」

「一緒にお買い物しよっ！」

「うん！」

＊　＊　＊

フランとこいしは店の中に入った。お互いに目的も品物を探し出した。

「白菜……て、これ？」

「そうだよ！……多分」
「お困りかい？お嬢ちゃん達」
威勢の良い声がした。小野塚小町。三途の川を案内する死神である。
「何か解らない事はあるかい？」
「豚肉、てどれ！」
「そこの角を右に曲がればあるよ」
「蟹さんは？」
「蟹ならそこの角を左に……」
とにかく彼女はよく働いていた。休む様子も見せずに……。

＊　＊　＊

「フランちゃんばいばーい！」
「またねー！」
太陽が沈み始めた。空は夕焼けになっている。お家に帰ろうと思ったその時だった。
「メリークリスマス！」

「え？」

赤い帽子を被った人がフランの目の前に現れた。現れるなり、手に持った大きな袋から箱を取り出す。

「君は良い子にしてたみたいだね。プレゼントだよ」

「わあ！有難う！……あれ」

フランがプレゼントを受け取ると、あっと言う間に謎の人物はいなくなってしまった。

「……？」

＊　＊　＊

紅魔館に着いたフランは門を通り、中に入る。すると、ロビーはまたしても賑やかだった。疑問に感じたフランは美鈴に訊ねた。

「ねぇ美鈴、今から何か始まるの？」

「あれ？妹様はクリスマスを知りませんでしたっけ？」

「クリスマス？」

「年に一度、サンタさんが子供達にプレゼントをあげるんです。今日はそのクリスマスを祝うパーティーですよ」

「サンタさん？」

「赤い帽子を被った人です」

「あ！私、そのサンタさんに会ったよ！！」

「え？……夢じゃないですか？」

「本当だよ～！」

「あら、妹様。御帰りなさいませ」

「咲夜～ただいま～」

「美鈴、今日はクリスマスパーティーだけど、門番の仕事はしなさい」

「はーい……」

「咲夜！私！サンタさんに会ったんだよ！本当だよ！」

「ふふっ、はいはい」

「咲夜さん！誰か来ました」

「今晩はー！」

「今晩は。お邪魔します」

「こいしちゃん！」
「古明地姉妹の御二人様ですか。これはこれは」
「でね、咲夜！これを見て」
「あ、フランちゃんも貰ったの？」
「こいしちゃんもサンタさんに会ったの？」
「うん」
「大きな箱ね。サンタさんから貰ったのかしら」
「開けて見ましょう」
二人の箱を開けると中には美味しそうなケーキ。とても大きく、甘い香りがする。
「丁度良かったわ。ケーキを買い忘れたの。これにしましょう」
「咲夜！客は揃ったわ！いつでも大丈夫よ！」
「有難う御座います。お嬢様」
「早く始めましょう！」
「そうだね」
「メリークリスマス！！」

＊　＊　＊

霧雨魔法店。霧雨魔理沙が営む店である。魔理沙は今、自分の部屋で寝転んでいる最中。

「全く……咲夜も凄い事を言うな……サンタになれ、なんてよ……。はあ、疲れた……」

ベッドの上で魔理沙はただごろごろと転がる。

「てか、私も呼べーッ！咲夜の無茶を聞いてやったのにぃ！！」

しかし部屋の中でただ愚痴り、怒る魔理沙は何か大事なものを感じていた。

「他人の幸せにすると自分に幸せが帰って来るって言うけど……あれって、本当なんだな」

最近は寒い寒い日が続き、幻想郷は寒気に見守られる日々。今日も、寒い冬が今日も幻想郷を暖め、一日が終わって行くのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5208x/

幻想日記帳

2011年12月22日23時47分発行